

---

# ヒナギクの過去

ゆうみん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒナギクの過去

### 【Nコード】

N4049E

### 【作者名】

ゆうみん

### 【あらすじ】

ヒナギクは、ご存知の通り、過去に本当の親に8千万をおしつけられ、いなくなったという過去を持つ。これはヒナギクの過去を描いた物語である。

## 第一話：親の様子

私の名前は、桂 ヒナギク 普通の女の子だ。

誕生日を迎える一日前までは・・・。

そんな事も知らない私は、いままで通りお母さんが作ってくれた朝食を食べた。

いただきます。と元気よく言い、パンを一口食べる。

私の隣にお母さんが座り、寂しそうな顔をして食べる、その隣に座るお父さんも。

いつもと違つと、気づいた私はお父さん、お母さんに声をかけた。

「お父さん、お母さん・・・何で元氣ないの？いつもなら、うれしそうに食べるのに。」

私は、お父さんとお母さんを見つめながら言う。  
先に返事したのは、お母さんだった。

「ヒナちゃん、心配してくれてありがとう、お母さんとお父さんは、ただお仕事で疲れてるだけなのよ」

お母さんは、私に向かってニッコリと笑顔を見せる、続けてお父さんも言う。

「そうだよ、だからヒナは何も心配しなくていいんだぞ。」

そう行つて、お父さんは、お母さんと同じように笑顔を見せる。

私には、その言葉と笑顔が疲れている以外に何かが、あるような気がした。

心の何処かに寂しさのような物が……。

「無理しないでね？困った事あったら、私に言つんだよ……」

私は、優しい言葉をお父さんとお母さんに言う。

二人は、ヒナは優しいね、と私にニッコリまた笑顔を見せてくれた。

食事中、私とお父さんとお母さんは、何一つ話もしない、ただ、無言のままだった。

私は、何一つ声がしない雰囲気にごちそうさまと言い、食器を洗った。

ヒナギクは、小さいころからしっかり者で、まじめだったのである。

そして、誰からも言われずに自主的にやるのだった。

．．．いつもなら、いろいろと話したりするのに。

私は、食器を洗いながら、そう思った。

洗った食器を食器棚に入れ、私は自分の部屋に行く。

自分の部屋といっても、姉と一緒にの部屋だった。

ドアを開けるとそこには、まだ寝ている姉　桂　雪路の姿があった。

ヒナギクの布団を勝手に雪路が、使っていた、よだれをたらしながら、いびきをかいている。

雪路は、昔と変わらなかった。

それを見て、ヒナギクはハァーとため息をつき、雪路を起こす。

「お姉ちゃん、起きてよ！今日学校でしょ？」

その時、雪路は大学生だった。

ヒナギクは、何回も言うがやっと返ってきた返事はこうだった。

「・・・先にいつて。」

スウ・・・、また寝てしまう。

ヒナギクは、まだ幼稚園で、送り迎えはお母さんと姉の雪路だった。

当時のヒナギクは、自転車も乗れず一人で歩いていけるはずもなかった。

万が一歩いていったとしても、30分はかかる。

ヒナギクの体力じゃ持たないだろう。

お母さんに送ってもらえば？と思う人はいるかもしれないが、ヒナギクはお母さんに

頼める状況では、無かった。

というわけで、ヒナギクは必死に起こす。

で、何とか時間はかかったが、雪路を起こす事に成功できた。

雪路は、起き上がり時計を見る。

「ヤバ！もうこんな時間じゃん、先生に怒られる。もうー何で早く起こしてくれなかったの??」

「何度も起こしたよ、お姉ちゃん」

雪路は、お母さんが作ってくれた朝食のパンを口にくわえながら、鞆を持ちヒナギクを抱えた。

ヒナギクを後ろに乗せ、かごの中に鞆を入れる。

「行つてきまーす」

私は、家に向かって大きな声で言う、雪路はそれどころでは無い。

雪路は、思いっきりペダルを踏む。

「しっかり捕まってよ！ヒナ、フルスピードで行くから。」  
「えっ？」

グオオオオオオー

はたして、雪路とヒナギクは、遅刻するのか??

次回に続く!!

## 第2話：自転車の巻

「幼稚園まで約10分・・・学校には約20分・・・」

雪路にはぶつぶつ数字を言いながら、何とかフルスピード状態を続いていた。

後ろに乗っているヒナギクは、そんな姿をボケっと見つめながら、今日のお母さんとお父さんの事を熱心に考えていた。

周りが見えなくなるくらい、だが風の音は聞こえていた。

雪路は、いつもと大人しいなあ・・・と感じヒナギクの方を見る。見えたのは、寂しそうな顔をしているヒナギクだった。

雪路は、そんなヒナギクに話しかけてみた。

「ヒナさ、お母さんたちと仲いいじゃん？何か話したの？」

・・・ヤバ、地雷踏んだ？

返事が返ってこないなあと思った時、やっとヒナギクは口を開く

「いつもと全然違うんだ、お母さんとお父さん。どうしたの？」と聞いても仕事で疲れているだけだから・・・とか言うんだけど心配で。」

最後まで言っているとヒナギクは、涙目になる、そんなヒナギクに雪路は、自分の左手をヒナギクの左手に安心させるようにギュッと握り締める。

そして、雪路はヒナギクが安心できるように自分の精一杯の励ましの言葉をかけた。

「大丈夫だよ、ヒナ・・・。お父さんとお母さんは最近、残業ばかりだし本当に疲れているんだよ」

だから、心配するなつてー例え元気じゃなくてもお姉ちゃん、元気だし！」

ヒナに向かつて雪路は、心配かけないように最高の笑顔を作った。そしてーその笑顔をもらったかのように、ヒナも雪路に笑顔を見せる。

「うん、そうだね！」

ホッ、やっと笑ったか……。と雪路は心の中で思った。

「・・・お姉ちゃんは、覚えてる？明日私の誕生日だよ！」

私は、うれしそうに雪路に言う、それを聞いた雪路は、忘れた様子も無くさっきの笑顔で  
当たり前よ、という顔して答えた。

「明日の夜、最高のプレゼントをあげるから楽しみに待ってなさいよ！」

その時の雪路は、ヒナに自信満々の顔をしていた、不自然なことも無い。

やがて、幼稚園も見えてくる。

遠くから見える、ヒナの通う幼稚園が最後に見えて来た。

ーじゃあね、ヒナー

私と雪路は、見えなくなるまで手を振り続けた。

私は、幼稚園の教室に向かった、そしてふと、思う。

お姉ちゃん、大丈夫かな??

そう、心配していた私であった。

### 第3話：学校と幼稚園

遅刻ギリギリセーフで来た雪路だった。

一時間目の数学に、数学以外の事を考えていた、先生から書くようにといわれている部分も

見逃していた「実は、いつも他の事を考えていて、まじめに授業を受けていない」

手も動かさずにいて、教科書も開けていなかった。

そして、隣にいる人から教科書を開いた方がいいよと言われ、しぶしぶ開く。

まあ、教科書ぐらいは開いた方が先生にばれにくいから、いいか・・。

開いて、他の事を考え始めた、それはいつもと違うくだらない考えでは、無く

ヒナのこと、お母さんやお父さんのことだった。

あんな、ヒナ見た事ないわ、お母さんとお父さんはずいぶん、ヒナの事がわいがつてたし

悲しい顔をさせる親では、無いとおもっけどな・・・。

まあ、最近残業も多かったし疲れているのも無理ないか・・・。

あの親が、ヒナを悲しませる事はしないと思うけどな。

ヒナの言葉によって姉、雪路にはいろいろと悩まされていた。

「おっ、雪路が珍しく真剣に勉強を考えているな、よしこの問題をやってみろ」

雪路が真剣に考えていることを、勉強だと勘違いしている先生であった。

問題を解けと急に言われ、困ってしまう雪路。

えーっと勉強の事を考えていたわけじゃあ無いんですけど!!

そう先生に言いたかったが、とても言える状況では無い。

シーンと静まり返り、みんなが雪路の事を見ているからだった。

え……っとこの法廷式は……マイナス一よね……？

自信が無い言い方で、雪路が答えを言う。

運か、神に恵まれているせいか当たっていた。

「よし、正解だ。」

そして、パチパチと全員からの拍手が来る。

「アハハ・・・」

苦笑いをしてしまった。

一方、その頃・・・ヒナギクの方は、昔から変わらず、正々堂々と答えていた。

「一円です。」

「さすが、ヒナちゃん・・・完璧だわ」

先生もこんな、優秀な生徒は見た事ないわと言い、私のことをほめていた。

幼稚園にしては、スゴイだろう。

姉と違って、ヒナギクは百点を取っていたのだから幼稚園の姉の時は、百点は一回しか取ったことが無いらしい。

私は、一時間目の課題を終わらせるとみんなよりも早い休憩時間をもらった。

もうやることは無いらしい。

私は、次の時間の国語の準備をして、教科書を読む

そんな姿にまた、先生は驚く。

「休憩時間だから、休んでもいいのよ」

「ハイ、ですが授業を受ける前の準備をしないと・・・。」

私は、そう言つてパラパラとページをめくる。

もはや、先生は驚くしかなかった。

先生は、とてもこの子を幼稚園児とは、思えないだろう。

普通の幼稚園児は、きつと着せ替えごっこや鬼ごっこなどをするが、ヒナギクは違った。

休み時間は、勉強に使つたのだつた。

周りの子も驚いていた・・・。

音楽になる、これは一時間目の終わりだ。

「みんな、頑張ったね。10分休憩してもいいよ」

雪路の学校にもチャイムが鳴り、休憩時間となる。

\*

\*

やがて、みんなのお楽しみの給食がきた。

「ヒナちゃん、一緒に食べようー」

友達にそう言われ、私の手をギュッと握り締める。

友達の隣に席を動かし、一緒に食べた。

高校の方は無かった。

お弁当だ・・・。

「お弁当作ってくるの忘れた・・・。」

グーおなかを空かせた姉だった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4049e/>

---

ヒナギクの過去

2010年10月10日13時00分発行